

「知られざる世界への挑戦」

—学校法人 京都外国語大学 創立65周年記念稀観書展示会—を拝見して

花田 謙一

History is the version of past events that people have decided to agree upon.

Napoleon Bonaparte

歴史とは、人々が同意した過去の出来事に対する見解である。

ナポレオン・ボナパルト

今回の知られざる世界への挑戦でもっとも印象深かったのは、『エジプト誌』である。古代エジプト文明を明らかにした超巨大な本であり、荒俣宏氏によれば「世界最大の本」とのことである。まずは図版の素晴らしさに圧倒された。スフィンクスと大型ピラミッドを眺望した光景が目に焼き付いている。ナポレオンは18世紀から19世紀への変り目のエジプト遠征の折に、文明に造詣のあったアレキサンダー大王を己に重ね合わせていたのではないかとの想像が湧き起こってきた。そういえば、昨年、大塚国際美術館で鑑賞した「ナポレオン戴冠式」の壮大さに圧倒され、しばらく突っ立っていたのを思い出す。憧れというか、ロマンというか、歴史のページの背後には現代人を圧倒する力があるのはまちがいない。コロンブス、バスコ・ダ・ガマ、マゼランしかり、お金や食糧不足、熱病等という大きな壁にあたりながらも航海を続けたのも、未知の世界への強い想いがあったからだ、同時に展示されていた種々の資料や日誌を拝見して感覚的に感じた。出来るならページをめくりたいとの衝動にどれだけかられた事か、お察し頂きたい。

さらに、『世界周遊記』に代表されるように初めて見る地を「地上の楽園」や「高貴な未開人」

と表現し、それらを単なる「野蛮な地」として見下すのではなく、むしろまだ知らぬものへの敬意を払っていたように感じた。上述のナポレオンが対英国戦略の一環としてエジプトに遠征しながらも学術調査団を派遣し、『エジプト誌』を編纂したのもその表れかも知れない。

また、仕事柄、電子媒体への意識が強いのだが、『エジプト誌』といった資料を拝見して、200年の時を経過してもなおオリジナルならではの「輝き」を肌で感じる事ができた。その印刷技術の高さ、大きさや色といったものがその当時の空気をリアルに伝えている。それが一層想像力をかきたててくれ、ドレイクキャプテンがマゼランに続いて世界を一周し、かつスペインのアルマダ無敵艦隊を破った光景も頭に浮かんだものである。

ナポレオンの冒頭の言葉を借りたら、歴史とは人々に忘れかけていた夢、ロマンを与えてくれる人々が同意した過去の出来事への想いなのかも知れない。貴重なコレクションと詳細な解説、心が躍る機会を与えて頂いた付属図書館スタッフの方々に深くお礼申し上げます。

はなだ けんいち (EBSCO Publishing Japan)